

携帯型超音波診断装置を用いた潜在精巢の探索

淡路基幹家畜診療所

○笹倉春美 橋本宰昌 畠中みどり 藤本修司
山本直史 濱崎健太 中川大輔 喜田利明

潜在精巢は雄性生殖器の先天性異常であり、精巢が腹腔内に残った腹腔内潜在精巢と、深鼠径輪と陰囊の間に停滞している鼠径部潜在精巢がある。当診療所では、田中らにより確立された腹膜ヒダアプローチ法による摘出手術を実施しているが、術前に潜在部位の確認を行わず、開腹により精巢の探索を行うため、患畜の負担や畜主の不安が懸念される。

今回、携帯型超音波診断装置を用いて、潜在部位を特定することにより確実な摘出が可能であったので報告する。

材料および方法

調査期間は2011年7月から2012年9月までとした。供試牛は、潜在精巢と診断された5～7ヵ月齢の兵庫県産黒毛和種牛9頭で、片側性7頭(症例1～7)、両側性2頭(症例8, 9)を用いた。全頭で皮下や鼠径部で精巢様構造物を触知しなかった。超音波検査(以下エコー検査)には携帯型超音波診断装置(Tringa Linear, 株式会社メディカルタスクフォース, 7.5MHz リニア型探触子)を用いた。術前に立位で、経直腸エコー検査にて、罹患側の背側、腎および膀胱付近を精査し、腹腔内の探索を行った。腹腔内に精巢を描出できなかった場合は、キシラジン鎮静下にて、後肢を開いて仰臥保定し、体表からのエコー検査により罹患側の鼠径付近の探索を行った。

結果

片側性潜在精巢の7症例のうち、症例1, 2で経直腸エコー検査にてそれぞれ腎後方および腹腔内の膀胱付近に精巢を描出したため、開腹して摘出した。症例3～7は経直腸エコー検査にて精巢様構造物は描出せず、体表からのエコー検査にて罹患側鼠径部に精巢を描出したため、描出部位の真上を切開して摘出した。両側性潜在精巢の2症例のうち、症例8は経直腸エコー検査にて両方の精巢を膀胱付近に描出したため、開腹して摘出した。症例9は経直腸エコー検査にて精巢様構造物は描出できなかったが、体表からのエコー検査にて右側鼠径部に精巢を描出した。さらに左側鼠径部付近を十分に探索したが、精巢様構造物が描出されなかったため、田中らの術式に従い開腹して探索したところ、鼠径付近の腹腔内に左側精巢を発見し摘出した。右側精巢は描出部位の真上を切開して摘出した。

まとめ

携帯型超音波診断装置の利用により、潜在精巢の術前検査が可能であった。従来は鼠径部の潜在精巢も触診では困難なために開腹により探索していたが、エコー検査を実施することで開腹を行わずに摘出することも可能であった。術前に精巢の潜在部位を特定することで確実な摘出が可能であり、患畜の負担軽減や、畜主へのインフォームドコンセントとしても有効であった。